

# ハーブティーな夜



mikatuki98

『もし、ローズヒップがローズバストという名前だったら……』

私は下世話な思考で、血の色よりは薄めのハイビスカス色の冷めたティーを飲んでいる。

『パステルピンクのカップはティーカップじゃなかったのが失敗だったかな。おまけに<HELLO KITTY>なんてロゴをプリントしてあるマグカップなんだから、色気も何もあったものじゃないわ。それに思い出したけど、このカップって個人経営の薬局に月一通いつめて集めたピョンちゃんシールと交換で貰った物だし……』

「なんか温い」

猫舌だから、と自分で冷めるまで置いておきながら不服そうに言うと、私はちょっと酸っぱいハーブティーをガブリと飲んだ。

「ねえ、カモミール。貴方のお陰で昨夜は身体の水分が半分になっちゃうかと思うくらい内蔵が働いて、夜が明けると同時に目が覚めてしまったわ。もちろん、直ぐに起き上がらなくてはいかないことはお分かりね？」

ふと今朝のトイレで、いつもと違って自分の身体状態を思い出して、皮肉交じりの甘え口調で彼・カモミールに話しかけてみた。もっとも彼・カモミールがティーバッグのハーブティーだなんて、恥ずかしくてあの人には言えない。そう、あの人を見かけたのは、森林公園から歩いて三分のお洒落なレストランだった。

私は知的な友人と知的な話題に、薔薇のような豪華さではなく、マーガレットのような清楚な雰囲気の花を咲かせつつ、時折となりの席のおじいさまの、昔の恋人との思い出話でもして顔を赤らめているかもね、と思わせる艶やかな視線を自意識過剰気味に感じていた。しかし本当は、そのおじいさんの二つとなりの席に座って私の方を遠目に見ている、あの子の涼やかな視線がずっと気になっていた。

其処へあの子の私への視線を遮るように、二十歳前後の苦学生のアルバイトに違いないわね、と妄想させる若者が注文を訊きに来た。

「食後のお飲み物は、何になさいますか？」

「あ、私はハーブティーをお願いします」

知的な友人がこの時コーヒーを注文していたことに、食後彼女の前に置かれたコーヒーカップで気が付いた。何せ私の視線、いや殆どの神経はあの子の方に向いていたからだ。

だけど全ては錯覚！そして妄想。

あの子は、私が座っていた席の直ぐ側にあるガラス張りのスクリーンから見える木々の緑の揺らぎを、ただ眺めていただけ。私は目の前のハーブティーにそっと心の声で囁きかけた。

『ねえ、ペパーミント。貴女はどう思う？あの子はホントは木々の緑の揺らぎを見ている振りをして、私の心の中を覗いていたりしないかしら？私の名前もみどりだし……ふ、そうね。しないわね！』

猫舌の誰もが飲める程度に冷めたペパーミントティーを一口飲むと、私は目の前に座っている

知的な友人がデザートのカレーケーキにフォークを刺している様子を眺めながら訊いてみた。

「ねえ、私ってハーブティーがよっぽど似合わない女よね？」

「あら、そんなことはないわよ」

私の質問に、どういうこと？とか、どうして？とか聞き返して来ないところがさすが知的な友人だ。

「そう？」

「ええ。よっぽど、とは思わないわ」

「あ、ありがとう……」

何も考えて無いようで、ちゃんと言葉を聞き分けているところがやはり知的な友人だ。私はあの人への想いを冗談にしてみえるように、知的な友人との会話を楽しんだ。ところがそれからほんの少しの間。あの方は私が知的な友人と歓談している間に店から居なくなっていた。木々を揺らす風のように店をすり抜けてしまったあの人。

「トワイニングさま……」

あの方のことを思い出して、私はあの方をそう呼んでみた。

『……だけど、一見お洒落に聞こえる名前も、ドイツでブレンドされ、片岡物産が輸入しているトワイニングのバラエティーパックの箱を見ていて思いついた、なんて絶対に口にしないわ！だってそこまでばらすと、ハーブティーな恋物語が俗っぽく聞こえて来るじゃない？ふ、ホント私ってお馬鹿さん。ハーブティーを飲むとあの方の透き通る瞳を思い出すからって、スーパーで買っておいたティーバッグの箱を毎晩眺めているんだもん』

私はすっかり冷めて口が萎むほどに酸っぱく感じるローズヒップ&ハイビスカスのハーブティーをの残りを飲み干すと、軽く鼻をならして笑った。

「恋の病を冷めたハーブティーで癒すなんて、とんだお笑い種だわね！」

了